

活 動 報 告

共同研究グループ活動報告（2021 年度）	284
講演会要旨	294
購入文献解題	296
所員自著紹介	302

共同研究グループ活動報告（2021 年度）

日中関係史

2021 年度もコロナ禍の影響で対面の研究会活動を再開することはできなかった。しかし、オンライン会議の導入を積極的に進み、東京と横浜以外の研究者との交流を積極的に図る機会になった。zoom 会議の例会記録はすべて <http://chineseovers.jugem.jp/> に掲載している。また、2021 年度の予算で人文学研究所叢書の論文集を刊行すべく鋭意準備を進めている（第 86 回例会の記録を参照のこと）。以下、本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

(1) 第 83 回例会

◎日時：2021 年 4 月 24 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：「文化大革命初期の北京の外国人留学生——『中共重要歴史文献資料匯編』所収資料に依拠して」（川島真，東京大学）

(2) 第 84 回例会

◎日時：2021 年 5 月 15 日（土曜）

◎場所：zoom 会議

◎内容：「汪精衛の日本留学と陽明学——その活動の背景」（関智英，津田塾大学）

(3) 第 85 回例会

◎日時：2021 年 6 月 5 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎内容：「国立国会図書館蔵『上海新華書店コレクション』について」（中村元哉，東京大学）

(4) 第 86 回例会

◎日時：2021年7月30日，31日

◎場所：zoom 会議

◎内容：論文集の予備報告会

[illegible]

(5) 第 87 回例会

◎日時：2021 年 10 月 2 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎内容：(1) 清国留学生の見た明治日本——『鴻跡帖』を手がかりとして（孫倩，河南農業大学外国語学院講師）

(2) 北京警務学堂派遣の旗人留学生と愛国主義（張潔，広島大学博士課程）

(6) 第 88 回例会

◎日時：2021 年 11 月 6 日（土）

◎場所：zoom 会議

◎内容：(1) 「日本と中国の同窓会の異同について」（佐藤量，立命館大学）

(2) 「日本語教育から見た清国人日本留学生」（酒井順一郎，九州産業大学）

※来聴歓迎

(7) 第 89 回例会

◎日時：2021 年 12 月 18 日（土），4 時～6 時 東京時刻

◎内容：(1) 「中国人留学生と日本の服装文化」劉玲芳（大阪大学招聘研究員）

（文責 孫安石）

色彩と文化Ⅳ

本研究は、2020～2022 年度の学内共同研究奨励助成金を獲得し、「多文化共生社会の言語景観——観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する——」という研究課題（代表者：鈴木幸子，メンバー 9 人）のもと、「言語景観」に焦点を当てた活動を展開している。2021 年度もコロナ禍の影響を受け、本研究に不可欠な実地調査は十分にはできなかったが、可能な範囲で最善を尽くした。その一方で、2020 年度からひきつづき、研究メンバー間で定期的にオンライン研究会を開催して、情報の共有をはかり討議を重ねた。

(1) 研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：4 月 28 日（金）20：00～23：00

会 場：Zoom

発表者：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ：最新の言語景観および観光関連の参考文献の紹介

第 2 回研究会

開催日：6 月 23 日（水）20：00～23：00

会 場：Zoom

発表者：佐藤梓（本学経営学部教員）

テーマ：「やさしい日本語とは何か」

第 3 回研究会

開催日：7 月 30 日（金）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ：「SDGs と観光」

第 4 回研究会

開催日：9 月 30 日（木）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：鈴木慶夏（本学外国語学部教員）

テーマ：「中国語言語景観からみた表現形式の適切性と情報発信の有効性」

第5回研究会

開催日：10月29日（金）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：由川美音（本学外国語学部教員）

テーマ：「観光情報資料に見る多言語化の特徴について」

第6回研究会

開催日：12月27日（月）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：高木南欧子（本学国際日本学部教員）

テーマ：「留学生を取り巻く言語景観——キャンパスを中心に——」

第7回研究会

開催日：1月28日（金）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ：日本における韓国語の言語景観と活用の可能性の模索
——韓国語の文法理解の向上の観点から——

第8回研究会

開催日：2月25日（金）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者：李忠均（本学国際日本学部教員）

テーマ：「京都における言語景観——韓国語を中心に」

第9回研究会

日 時：3月18日（金）17：00～20：00

会 場：Zoom

発表者1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）・尹亭仁（本学国際日本学部教員）・
由川美音（本学外国語学部教員）

テーマ1：「神戸・南京町と長崎・新地中華街における言語景観と多文化共生の現状
——横浜中華街との比較を中心に」

発表者2：尹亭仁（本学国際日本学部教員）

テーマ2：「熊本市・鹿児島市・宮崎市における言語景観と取組みの特徴」

第10回研究会

日 時：3月28日（月）17：00～20：00

発表者：小林潔（本学国際日本学部教員）

テーマ：「国内観光地のロシア語使用について」

(2) 海外調査

なし

(3) 国内調査

- ・鈴木慶夏：2021年9月3日（金）～9月10日（金）
[北海道6空港と道東観光地の言語景観調査]
- ・尹亭仁：2021年12月2日（木）～12月4日（土）
[新潟市の言語景観調査]

- ・李忠均：2022年1月29日（土）～1月31日（月）
[京都の言語景観調査]
- ・鈴木幸子・尹亭仁・由川美音：2022年2月21日（月）～22日（火）
[神戸市および南京町の言語景観と多文化共生の調査]
- ・尹亭仁：2022年3月6日（日）～3月9日（水）
[熊本市・鹿児島市・宮崎市の言語景観の調査]
- ・鈴木幸子・尹亭仁・由川美音：2022年3月14日（月）～16日（水）
[長崎市および長崎新地中華街の言語景観と多文化共生の調査]
- ・小林潔：2022年3月23日（水）～3月25日（金）
[長野県妻籠における観光・宿泊施設の言語景観調査]
- ・李忠均：2022年3月25日（金）～3月28日（月）
[京都市内・琵琶湖周辺の言語景観調査]

(4) 講演会の開催

第1回講演会

日 時：5月26日（水）17：10～19：00

会 場：Zoom

演 題：「バルセロナの独自性にみられる言語景観」

講演者：堤明子氏（本学卒業生，スペイン・カタルーニャ州公認ガイド）

第2回講演会

日 時：8月27日（水）17：10～19：00

会 場：Zoom

演 題：「コロナとこれからの観光」

講演者：鈴木彩氏（福岡県観光連盟誘致部係長）

第3回講演会

日 時：11月27日（土）9：00～11：00

会 場：Zoom

演 題：「アメリカ第三の都市シカゴにおける多文化共生と言語景観」

講演者：齋藤葵氏（本学卒業生，アメリカ・ノースウェスタン大学博士課程）

第4回講演会

日 時：3月12日（土）14：00～16：00

会 場：Zoom

演 題：「言語政策・観光政策から考える言語景観」

講演者：藤井久美子氏（宮崎大学多言語多文化教育研究センター教授）

(5) 研究成果

鈴木幸子：Commodification of Culture and its value as a tourist resource: Drawing from the linguistic landscape of Yokohama Chinatown 『人文研究所報』67号

(6) 著作権関係の情報収集

本研究課題は、現地調査の過程で撮影した写真の使用が欠かせないため、今後の研究発表、とくに刊行物での発表において著作権関係の問題が生じる可能性を見極める必要がある。現在は、当該分野に精通する専門家からのアドバイスを受けるべく、検討・相談の場を設ける計画を進めている。

本研究課題の遂行には国内外での実地調査が必要不可欠である。新型コロナウイルスの感染状況等に

注意しながら、2022 年度も実行可能なことを中心に研究活動を進展させる予定である。

(文責 鈴木慶夏)

言語変異研究

1. 今年度の主な研究内容：
今年度は主に歴史対照言語学に関する資料調査と、中国語の「国語」の成立と 9～13 世紀における中国大陆の多言語接触に関する研究、執筆活動を行った。
2. 今年度の主な研究成果：
「中国語標準化の実態と政策の史話——システム最適化の時代要請」の論文執筆完成（『言語の標準化を考える』大修館書店 2022 年 3 月出版予定、校正中）
3. 今年度購入された主な研究所所蔵資料：
『鄭玄論叢』
『老子異文化総彙』
『魔天与摩登：近代上海摩天楼研究 1893-1937』
『敦煌漢文本大智度論整理与研究』
『孫可之文集校注』
『毛傳鄭箋補正』
『中国年度小小説（2020）』
4. 2022 年度は引き続き歴史社会言語学、歴史対照言語学に関する研究調査を実施する予定である。
(彭 国躍)

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
 - 第 1 回研究会
開催日：2022 年 1 月 31 日（月）
会 場：オンライン
発表者（所属）：角山朋子（国際日本学部・国際文化交流学科）
「ウィーン工房の女性たち：ウィーンの近代デザインと女性の関わり」
新メンバーに自身の研究を簡単に紹介してもらった。ウィーン工房での女性デザイナーの活動などが紹介されたが、学校・工房という制度やジャンル、素材・媒体に潜むジェンダーも浮き彫りになった。
 - 第 2 回研究会
開催日：2022 年 2 月 18 日（金）
会 場：オンライン
発表者（所属）：熊谷謙介（国際日本学部・国際文化交流学科）
「「動物、種、ジェンダーの表象を考える」とは？」
2020 年に出版した『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』に続く叢書のテーマを検討し、それに沿った研究計画をたてた。
2. シンポジウムの開催 なし
3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』を2019年度に出版したが、その後に続く企画として、2020年度から「種」や「動物」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して、学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。第1回研究会では、まず角山朋子氏が専門のデザイン史について、ジェンダーとの関連で発表を行った。20世紀初頭、ウィーン工房には女性デザイナーが多く活動を行ってきたが、その意義が、当時の社会状況や隣接する芸術運動との関連から論じられた。本研究グループの身体とジェンダーという問題に直結するテーマで、デザインや素材というトピックの重要性が浮かび上がった。第2回研究会では、熊谷謙介が昨今のマルチスピース人類学の見地や、従来の人間と動物の関係性を問う文化研究の知見を紹介し、動物とジェンダーの絡み合いを探る作品分析の例も見ること、動物・ジェンダー表象研究に取り掛かる上での枠組みが紹介された。

(文責 熊谷謙介)

自然観の東西比較

1. 研究会の開催

開催日：1月31日（月）15：00～

会 場：Zoom

発表者：伊坂青司先生

演 題：「神仏習合の歴史と現在——自然信仰の視点から」

2. シンポジウム

開催せず。

3. 活動内容

今年度も、新型コロナの影響もあり、予定通りの研究会を開くことが出来なかったが、年度末に1回開催することが出来た。

(文責 上原雅文)

ヒト身体の文化的起源

活動報告：

① 人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討した。

I. アキレス腱の屈曲点の位置と増幅効果との関係性を調べた論文「Biomechanical gain in joint excursion from the curvature of the Achilles tendon: role of the geometrical arrangement of inflection point, center of rotation, and calcaneus」がDiagnostics誌に掲載された。

(文責 衣笠竜太)

日中韓対照言語研究

本研究会は、2020年度からすそ野を広げ、中国語を加えた形で本格的に「日中韓対照言語研究」をすすめることにした。しかし、昨今の状況により、本年度は積極的に取り組むことができなかった。

研究会の開催

(1) 日 時：2021年6月30日（水）17：00～19：00

場 所：Zoom

発表者：山田 昌裕（本学 国際日本学部日本文化学科教員）

テーマ：格非標示名詞句の格

(2) 日 時：2022 年 1 月 27 日（木）17：00～19：00

場 所：Zoom

発表者：高木 南欧子（本学 国際日本学部国際文化交流学科教員）

テーマ：日本語の誤用分析——自然発話と作文における差異——

(3) 日 時：2022 年 3 月 29 日（火）17：00～19：00

場 所：Zoom

発表者：尹 亭仁（本学 国際日本学部国際文化交流学科教員）

テーマ：日本語を母語とする韓国語学習者の作文にみる母語干渉の諸相

年 2 回以上の研究会の開催を計画し、活性化を試みている。対照言語研究の観点から日中韓以外の言語の研究者にも参加を呼びかけている。メンバーによる発表に加え、海外の研究者にも参加と発表の機会を提供していきたい。

（文責 尹亭仁）

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：2022 年 1 月 22 日

会 場：ZOOM 開催

講演者：長澤唯史氏（相山女学園大学）

演 題：SF とロックの文化的マトリックス——ポストモダニズム再評価を手掛かりに

2. 活動内容

本研究グループは、活動 6 年目である。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐする方法や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。講演会による講師のレクチャーから多くの刺激を得ることはもとより、さまざまな専門領域、方法論を携えたメンバーによる、それぞれの立場から質疑・意見交換を行い、お互いの知見を深めた。

（文責 松本和也）

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし

シンポジウムの開催：1 回

The 2nd Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility

Date and time: Friday, 26 November 2021, 17:00-20:00 (JST), 9:00-12:00 (GMT)

Venue: Zoom

Language: English

Speaker

- Ute Leonards (University of Bristol)
- Nick E. Scott-Samuel (University of Bristol)

- Goro Maehara (Kanagawa University)
- Tatsuya Yoshizawa (Kanagawa University)

Abstracts

1. When vision leads the body astray

Ute Leonards (University of Bristol)

Twenty years ago, vision scientists Goodale and Humphrey stressed that “vision evolved in animals, not to enable them to ‘see’ the world, but to guide their movements through it” (Goodale & Humphrey, 1998, p. 183). Yet, apart from research into obstacle avoidance and optic flow, even today there is little crosstalk between visual cognition and locomotion research, preventing us from understanding the role of visual information processing for real world behaviour. Here, I present work from my lab that reveals how the visual environment affects our gait, often in unexpected ways, even when we walk in obstacle-free environments on even ground. Experiments show how the validity of space perception is affected by floor patterns, impacting basic gait kinematics, foot placement, our ability to walk straight, and even overall walking confidence.

2. Effects of context on appearance: insights from camouflage

Nick E. Scott-Samuel (University of Bristol)

I will report some recent findings from my lab about various aspects of camouflage: translucency, dynamic background matching, distance dependent effects, and image complexity. I will argue that these offer useful generalisable lessons for perception.

3. An implausible impression of stereogram could be due to perceptual enhancement of luminance modulation.

Goro Maehara (Kanagawa University)

Although stereograms provide a sensation of depth, they often look artificial and somewhat implausible. This could be partially due to their appearance of luminance contrast. Previous studies have shown that binocular summation in contrast detection thresholds went down to the level of probability summation as binocular disparity increased. However, little is known about the effect of binocular disparity on the appearance of luminance contrast patterns above threshold. To address this issue, we measured the luminance contrast of stereoscopic stimuli at the perceptual match to a certain fixed contrast owned by reference stimuli with zero binocular disparity. The matched contrast of the in-phase stimulus, which had luminance modulations in the same phase between eyes, was veridical at 0 degrees of binocular disparity and decreased as the disparity deviated from 0 degrees. On the other hand, there was no significant difference between the monocular matching contrast at 0 degrees and 0.5 degrees eccentricity, indicating that the reduction in matched contrast requires a stereoscopic presentation. These results suggest that suprathreshold stimuli with binocular disparity appears having higher luminance contrast than stimuli with zero disparity.

4. Luminance and chromatic information to produce visual plausibility in the material perception.

Tatsuya Yoshizawa (Kanagawa University)

What visual cue produces the visual plausibility of an object is an essential psychological question. Last decade, it was argued that statistical luminance information had a prominent role in perceiving texture in recognising an object's surface. We have explored how luminance and chromatic information contribute to the object perception, regarding local and global spatial structures and statistical property. We found that local luminance structure was crucially important information to perceive material surface. We also

showed that chromatic information provided rich information to identify a particular object among objects within the identical category. This indicates that luminance and chromatic information has different function to produce visual plausibility in the material perception.

活動内容：

本研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度も、新型コロナウイルス感染防止の観点から、研究交流が十分できなかったが、一昨年度開催したシンポジウムを遠隔で行い、英国研究者2名と本グループメンバー2名に講演いただき、その後討論を行い理解を深めた。報告時点では1回のシンポジウムであるが、2月に2回目のシンポジウムが予定されている。

2021/01/12

報告者：吉澤達也

学びの見える化

(1) 研究会の趣旨

各研究テーマに応じた専門職の人材育成の見える化を行い、教育・学習のあり方や体系化を検討する。各自のテーマを持ち寄り、研究報告及び意見交換を行う。

(2) テーマとメンバー

「ボランティア評価に関する研究」「アクティヴ・エイジングに関する研究」

齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部・教授）

「技術・技術指導の理論と実際」

森和夫（神奈川大学人文学会研究員、株式会社 技術・技能教育研究所）

「社会化と個人化の一体的支援」「個人完結型から社会開放型への転換」

「原点回帰としての癒しの評価」西村美東士（若者文化研究所代表、聖徳大学非常勤講師）

森小夜子（トヨタ自動車）

「社内における人事管理と育成」

下津祥子（医療法人聖心会かごしま高岡病院）

「看護師の育成——CUDBAS手法の活用」

大瀬恵子（一宮研伸大学看護学部）ほか

「女性の健康生活支援看護助産に関する研究」

(3) 研究成果

森和夫（2021）『技術・技能指導の理論と実際』職業教育開発協会　ほか

(4) 研究実施日

月2回、土曜日9時～14時ごろ　全20回（ZOOMにて）

4月10日・24、5月8日・22日、6月5日・19日、7月3日・17日、9月4日・18日、10月9日・23日、11月6日・20日、12月4日・18日、1月8日・22日、2月5日・19日

（文責　齊藤ゆか）

芸術（アート）と物語の交雑／発信力

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

開催日：2022年2月18日

会 場：ZOOM 開催

講演者：伏木啓氏（名古屋学芸大学／演出家・映像作家）

演 題：伏木啓作品の表現の射程

活動内容

本研究グループは、2020年秋に結成したもので、今年度は2年目となる。今年度中の活動としては、各自が研究会テーマに即した活動をそれぞれ進めつつ、問題関心をすりあわせていった。なお、全体の活動としては、上記講演会を催し、さまざまな要素が交錯する芸術（アート）について、研究を深めて行く予定である。

（文責 松本和也）

おとぎ話文化研究

今年度はメンバー各自がおとぎ話文化に関する研究調査と研究成果の公表に向けた準備を進め、メンバー間で互いの研究内容についての批評や助言をメールとZoomにより継続的に行った。来年度は国内外の学術誌および出版社からメンバー各位の研究成果の刊行が予定されており、刊行後に互いの研究成果に対する批評を交換する研究会を開催する。

代表者の本共同研究グループの研究課題に関する研究成果の一つとして、本共同研究グループのメンバーによるこれまでの出版物を含む以下の図書展を、本学図書館の蔵書から選書して開催した。

展示タイトル：Fairy Tales and Visual Culture おとぎ話と視覚文化

日時：2022年1月7日（金）～3月下旬

場所：神奈川大学みなとみらいキャンパス図書館2F展示スペース

（文責：村井まや子）

講演会要旨

1. 演 題：バルセロナの独自性から見る言語景観

講演者：堤 明子

(カタルーニャ州公認ガイド)

開催日：2021年5月26日（水）

会 場：Zoom

共同研究グループ「色彩と文化Ⅳ：言語景観と外国語教育」において、カタルーニャ州公認ガイドの堤明子さんをお招きし、バルセロナの言語景観について講演を行っていただいた。

ご講演いただいた内容は、スペインにおけるバルセロナの位置づけ、公用語について、観光、言語景観の4点であった。

まず、スペインにおけるバルセロナの概要においては、多言語、他民族が共存するまでの過程を複雑な歴史的、政治的背景や政府と言語の政策からご説明いただいた。次に、公用語については、現在、スペイン国内において認められている公用語とカタルーニャ語の位置づけ、及び、それぞれの言語的特徴や言語話者の属性についてのお話があり、統計や具体的事例からご紹介があった。さらに、バルセロナの観光については、スペインがフランスに次いで世界第2位の観光大国であること、スペイン国内においては、カタルーニャ州がトップであることとその背景、さらにオーバーツーリズムの弊害と具体的な対策についてご説明があった。最後に、これらを踏まえ、バルセロナの言語景観を概観し、バルセロナにおいて特徴的な言語表記やサイン、及び市民の受け止められ方を紹介いただいた。

講演会は研究メンバーだけでなく一般公開としたが、参加申し込みの際のアンケートでは、観光、言語景観、及びスペインそのものに興味がある参加者が多いことが分かった。質疑応答も活発に行われ、コロナ禍で国境を越えた調査研究が難しい中、海外の事例を直接知ることができる非常に貴重、かつ有益な講演となった。

(文責 高木南欧子)

2. 演 題：文化的慣習はどのようにして習得されるか？ 語の意味体系の習得過程から見えること

講演者：佐治伸郎（鎌倉女子大学児童学部・准教授）

開催日：2021年6月26日（土）

会 場：Zoom

本講演は、人文学研究所共同研究グループ「知覚認知システムの普遍性と多様性」と日本音楽知覚認知学会が、令和3年日本音楽知覚認知学会春季研究会の特別講演として共同で開催したものである。講演会には、学会会員を含め約80名が参加した。

音楽と言語は、どちらも、各自が経験を通して獲得してきたスキーマ（schema）の束縛や導きを受ける点で、知識への依存性の高い高次認知活動といえる。すなわち、どちらの認知活動にも各自の属する文化的慣習が反映されているわけである。

私たち人間は、文化特異的な言語や音楽をどのように習得していくのであろうか。本講演会では、言語心理学者である佐治氏に、子どもが言語をどのように獲得していくのかを解説いただいた。具体的に

は、子どもが語の意味体系を獲得する過程にて知覚的要因（例えば、認知優先説）と文化的要因（例えば、言語けん引説）がそれぞれどのように、また、どのように影響し合っているのか、その研究背景が紹介された。その後、語彙の中でも色語彙の獲得過程に焦点を当て、異なる言語文化圏を通じた色語習得過程の解説がなされ、その習得のしやすさ、しにくさに影響を与える要因を追究した数多くの実験研究（例えば、Saji, Imai, & Asano, 2020 in Cognitive Science）が紹介された。講演後、フロアーにいる音楽心理学者達との質疑応答を実施した。そこでは、主に、人間が言語や音楽といった文化依存的なスキーマをどのように習得していくのか、その一般的原理について議論がなされた。

（文責 松永理恵）

3. 演 題：SFとロックの文化的マトリックス——ポストモダニズム再評価を手掛かりに

講演者：長澤唯史氏（相山女学園大学 国際コミュニケーション学部 教授）

開催日：2022年1月22日（土）

会 場：Zoom

本講演会は、共同研究グループ「各国近代文学の研究」の研究活動のひとつとして開催された。公開研究会として外部にも公開され、講演後の質疑応答も活発であった。

講演者の長澤氏は、アメリカ文学とポピュラー音楽研究を専門とされており、とりわけSF文学と1970年代以降のロックミュージックの研究がその中心にある。これらの研究は相互に深く関連しており、領域横断的な文学と文化の研究として捉えることができる。その成果の一部は、2021年に『70年代ロックとアメリカの風景 音楽で闘うということ』（小鳥遊書房）としてまとめられている。本講演会では、長澤氏の研究方法を理論的な水準において広く検討し、その研究の射程を検証するという高度かつダイナミックな議論が展開された。その際、ポストモダン／ポストモダニズムという理論的視座がその中核に据えられ、これらの強度を再検討することによって、氏の研究の方法論的要点と可能性が示された。このような方法論的意識が高い講演内容は、文化研究のインパクトを受けて以降の近代文学研究の対象の拡張性（とりわけポピュラー文化に対する）への反省的検討を促すのみならず、文学理論・批評理論そのものをどのように再構築し、研究に援用してゆくのかという根本的な問題を意識させるものであり、本研究会の設立趣旨に合致する大変刺激的なものであった。

長澤氏の発表は、簡単に要約することが憚られる複雑かつ豊かな議論によって構成されていたが、敢えてそのポイントを示すならば以下のようにまとめられる。まず、氏の方法論である「文化的マトリクス」が、佐々木守というクリエイターのケーススタディから説明され、その後、その方法論に基づきSFとロックの関連性を論究することの意義が提示された。さらにその方法論が、ポストモダン／ポストモダニズムという視座によって捉え返され、安部公房やクリストファー・プリーストの作品を通じてその可能性が検討された。その際、「二重コード化」「アヴァン・ポップ」というタームがその具体的な分析の枠組みになることが説かれた。また、ポストモダン／ポストモダニズムについては従来の理解の枠組みを更新すべきという指摘がなされ、思弁的実在論とのアーティキュレートが示された。

（文責 水川敬章）

購入文献解題

『現代の洋画〔復刻版〕』

編著者：木村一信・竹松良明編

出版社：臨川書房

出版年月：1989年6月

日本洋画協会を発行所とした『現代の洋画（復刻版・全28号29冊）』（創刊号（明治45年）～28号（大正3年）終刊迄）に、「解説・総目次」・「作者別索引」が付されている。

この雑誌の意義を示すには、まず近代日本に洋画がどのように根づいたかを振り返っておく必要がある。印象派以降の新たな西洋美術の動向が日本に紹介され、実作も発表されるようになっていくのは明治末年である。明治40年には文展が創設され、前後して、荻原守衛、斎藤興里、高村光太郎、柳敬助、藤島武二、有島生馬、山下新太郎らが、新帰朝者として欧州留学の成果を日本で発表しはじめていく。この時期から、印象派、ポスト印象派、フォーヴィズム、立体派、未来派などが、ヨーロッパでの時系列的な展開を凝縮するように一挙に日本に流れこんでくる。ここに、『スバル』や『白樺』といった文学・美術雑誌も関わって、大きなムーブメントが生じていく。こうした動きを支えたのが、北山太郎であり、雑誌『現代の洋画』であった。

『現代の洋画』には、2つの特色が指摘できる。

1つは、現在のように洋画の実物をなかなか目にすることができない状況下で、多色刷または一色刷の図版が多数掲載されていたことである。これは、青年画家にとって喜ばしいだけでなく、西洋美術の新動向を具体的な絵画表現を通じて知る貴重な機会であったことは疑いない。

もう1つは、西洋美術に関する評論に加えて、洋書からの翻訳などを通じて、最新の動向や成果が、日本語として広められたことである。特に「後期印象派特集号」（大正2年8月号）や、「ロダン特集号」（大正3年3・4月号）などは、『白樺』の誌面とあわせて、時代の雰囲気をよく伝えるものである。なお、両者とも人気を博し、特に前者は初版が売り切れて再版が出されたほどであった。

こうした洋画が日本に定着する前後の動向を照らし出す『現代の洋画』は、美術領域だけでなく明治期における西洋受容の一コマとして実に貴重な文献である。

（文責 松本和也）

『沖縄県議会史』第3巻, 第22巻

編著者：沖縄県議会事務局

出版社：沖縄県議会

出版年：第13巻＝2014年

第22巻＝2007年

〈内容〉

『沖縄県議会史』は1984（昭和59）年の第4巻と第5巻の刊行から始まり、2014（平成26）年の第3巻で全22巻が完結した。今回は入手可能な第3巻, 第22巻の購入となった。残りの巻は、今後随時追加する予定。

『沖縄県議会史』は沖縄県議会の歴史や関連資料をまとめたものだが、近現代における沖縄の歩みを反映して他都道府県の一般的な県議会史とは異質な資料的価値を持っている。特に戦後においては群島議会、そして琉球政府立法院という米軍・米国占領統治下の記録となる。そのため、占領統治下の沖縄社会、住民の動向を知る上で不可欠な資料の一つだ。第1巻から第3巻は通史編、第4巻から第22巻は資料編、第13巻から第16巻までは群島議会、第17巻から21巻までは立法院に関する資料である。

今回購入できた第3巻は、「通史編3」で1958（昭和33）年から「日本復帰」（1972年5月15日）前日までの期間を対象とし、まさに米国統治下の時期である。高等弁務官制度創設などの米国統治の強化、ケネディ大統領による沖縄新政策の発表、キャラウェイ旋風、行政主席公選の実現、B52戦略爆撃機墜落事故、日米共同声明での1972年返還合意、沖縄住民の日本国政参加の実現、沖縄返還協定の締結、ドルから円への通貨切り替えなど大激動の沖縄における琉球政府立法院の議論等について記述されて、いわゆる「日本本土」とは異なった沖縄の戦後を伝える。

第22巻は「資料編19」で「議員名鑑」である。明治、大正、昭和戦前期の沖縄県議会議員から、奄美、沖縄、宮古、八重山の各群島議会議員、そして琉球政府立法院員議員という公選議員の紹介、戦後の沖縄諮詢会などの非公選議員等の名簿も収録する。また、第1回沖縄県議会選挙（1909年5月11日）から、第8回立法院議員総選挙（1968年11月11日）までの概要も収録されている。異色な歴史を歩んだ沖縄の県議会史を選挙や具体的な議員から知ることができる巻である。

（文責 後田多敦）

Hotel Design, Planning and Development 2nd Edition

著 者：Richard Penner, Lawrence Adams, Stephani K. A. Robson

出 版 社：Routledge

出版年月：2012 年 10 月

ホテル業界に関する基礎的な内容の参考資料である。ホテルの歴史や種類・分類等のベースとなる知識から、世界各地の多様なホテル（アーバンホテル、カジノホテル、コンベンションホテル等）の外観、インテリア、フロアプラン等の 514 件のイラストが示されており、ホテルの建築デザインとプランニングについて視覚的に理解することができる。出版された 2012 年を基準に、過去 10 年間の業界トレンドが分析でき、ホテル開発における立地・需要分析、資金計画、マーケットセグメント、オペレーション、ゲストルーム・パブリックスペース等の計画策定について、複数の数値データとともにケーススタディを用いた解説が示されている。ホテル開発側の視点の理解に役立つ。

Table of Contents

Part 1: Hotel Types

1. Overview
2. Urban Hotels
3. Design Hotels
4. Suburban Hotels
5. Multi-branded Hotels
6. Mixed-use Hotels
7. Resorts
8. Casino Hotels
9. Convention Hotels
10. Conference
11. Residential Hotels and Time-Share Properties
12. Updating Existing Hotels

Part 2: Design Guide

13. Site and Master Planning
14. Programming and Development
15. The Guestroom Floor
16. Guestroom and Suite Design
17. Public Space Design
18. Administration and Back-of-house Design
19. Technical Coordination and Construction
20. Future and Fantasy.

（文責 崔瑛）

『鄭玄論叢』

著 者：耿天勤

出版社：北京聯合出版有限責任公司

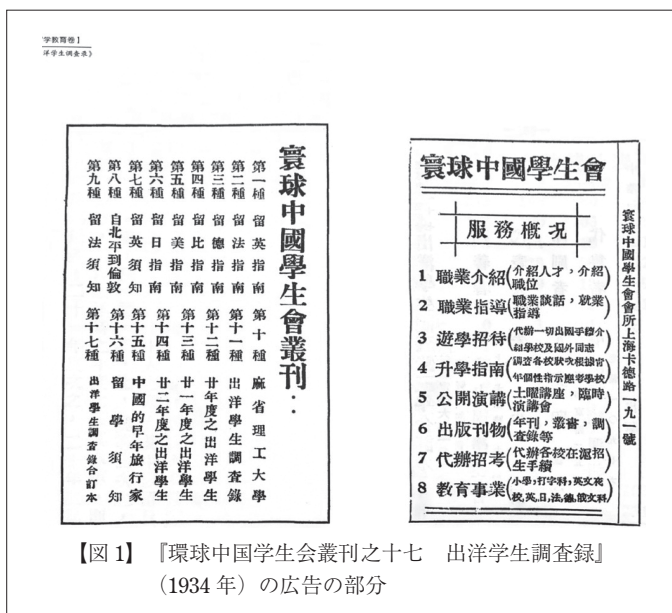
出版年：2020 年

解 題：

鄭玄（127～200 年）は中国漢代を代表する経学者、訓詁学者である。『後漢書』によれば、彼は、漢代の訓詁学大家馬融（79～166 年）に師事し、10 数年間の学業を終え故郷の北海高密（今山東省）に帰ろうとした時、馬融に「これで学問の中心が東に移るだろう」と惜しまれたという。その後帰省した鄭玄はあらゆる官職の誘いを断り、古代文献の注釈に専念した。後世の人々は、鄭玄にかかわる学問研究を、『説文解字』を著した許慎（58～147 年）の「許学」に並べ「鄭学」と称した。鄭玄が生涯訓釈した書物は 80 種類にものぼったと言われるが、その多くはすでに散逸した。今に伝わったものには『詩経』、『禮記』、『周禮』、『儀禮』への訓注があり、外に転注、引用などによって間接的、部分的に伝わったものには、『尚書』、『孝經』、『論語』、『周易』の注釈などがある。鄭玄の注釈には、周代（紀元前 1050～前 256）の風俗、文化、思想、制度、法律、言語（音韻、意味、含意）など古代中国の多様な方面に及んでいる。

本書は、著者の山東師範大学歴史学院教授耿天勤が長年蓄積した研究成果の集大成である。本書の中で特に「経学の教育者としての鄭玄」「法律解釈家としての鄭玄」「鄭玄学の形成と漢代経学の統合」「鄭玄と何休の論戦」「鄭玄の政治思想の形成」「鄭玄の注釈にみる自然科学の知識」などの章には新しい視点が多く含まれている。本書は、鄭玄研究の重要な参考文献として、そして中国の民俗学、文献学、言語学の歴史を追跡するための基礎資料として利用することができる。

（文責 彭国躍）



【図1】『環球中国学生会叢刊之十七 出洋学生調査録』
(1934年)の広告の部分

『中国近代教育文献叢刊・留学教育巻』の第2冊は、「出洋学生調査録」、「同瀛録」、「東京留学要覧」、「清国留学生会館第一次報告」、「留学生鑑」の5編の資料を紹介している。

このうち、「留学生鑑」については、拙稿『『留学生鑑』(啓智学社、1906年、中国語)を読む——中国人留学生の日本生活案内書』(野世英水ほか編『近現代東アジアと日本文化』、銀河書籍、2021年)、拙稿「清末の中国人留学生と『昆虫採集』、そして浙江省『昆虫局』」(神奈川大学、『人文研究』第203号、2021年)、拙稿「中国人留学生と明治時代の東京遊学案内書」(東京大学東アジア藝文書院編『一高中国人留学生と101号館の歴史』、東京大学出版会、2022年)を発表している。また、「清国留学生会館第一次報告」についても郭夢焄「清末中国人日本留学生の初期活動について——勵志会と詠書彙編社を中心に」(孫安石・大里浩秋編『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』、東方書店、2019年)、拙稿「清国留学生会館研究初探」(『中国人留学生と「国家」「愛国」「近代」』、東方書店、2019年)が発表されているので、あわせて一読をお願いしたい。

第2冊に収録されている資料が清末時期を対象にしているとすれば、「出洋学生調査録」は1934年に刊行されているから若干、その性格が異なる。この「出洋学生調査録」を編纂した環球中国学生会についてはまだ不明なことが多く、中国側の記載には清末に組織され、1926年に活動を停止したという記述が見える。しかし、【図1】の広告「環球中国学生会」には同学生会が刊行した叢書第17種類を掲載している。ここから1926年に活動を停止した、とする記述が間違いであることが分かる。また、同書の最初の頁の記述には、環球中国学生会が20余年余り中国人の海外留学を紹介してきたという記述が見えることから創立は1910年代を前後した時期であることが推測される。

また、同書の裏表紙に掲載された環球中国学生会の服務概況によれば、同学生会が(1)職業の紹介、(2)職業の指導、(3)留学の紹介、(4)学年進学の相談、(5)講演会の設定、(6)年鑑、叢書、調査書などの出版事業、(7)事務代理、(8)教育事業などを展開していたこともわかる。

この「出洋学生調査録」の日本留学生の部分の統計によれば、(1)1930年7月から1931年6月までの留日学生は合計671名、(2)1931年7月から1932年6月までの留日学生は合計130名、(3)1932年

7月から1933年6月までの留日学生は合計230名で3年間の合計1031名であったことが分かる。また、この留日学生を省別の人数順で並べると3年間の間、広東省213名、浙江省113名、遼寧省105名、江蘇省82名、福建省79名の順に並ぶことがわかる。浙江省と江蘇省の留学生の他に、広東省と福建省の留学生が多かった理由とその詳細な内容は今後、さらなる検討が必要である。(続く)

文責 SON Ansuk (孫安石)

所 員 自 著 紹 介

1. 関口博巨『近世村落の領域と身分』

吉川弘文館, 2021 年 2 月, 396 頁

本書は、近世の村の領域や社会空間、身分はどのように仕切られていたのかという関心で書いてきた論稿 11 編を収録したものである。全体の構成は以下のとおりである。

序章 問題の所在と本書の構成

第一部 村の構造と「村」領域——ムラの仕切り

第一章 関東の「村」と百姓土地所持／第二章 関東の「村」と村運営／補論 賤民の「村」と弾左衛門支配／第三章 土地慣行にみる「ムラの自力」

第二部 百姓と従属民——身分の仕切り

第一章 奥能登における「下人」化の諸景気／第二章 奥能登における「下人」の職能と生活／第三章 甲州山村の家抱とその「自立」

第三部 身分社会の越境者——仕切りの透過性

第一章 ムラと越境者の近世史・素描／補論 寛政三年の陰陽道騒動／第二章 屋敷墓・持仏堂・道心者／第三章 江戸地廻り経済の展開と近江商人

終章 本書の総括と展望

本書の核となっているのは、1990 年代前半に発表した古い論稿である。旧稿発表当時はそれぞれに異なる問題関心があったが、一書にまとめるにあたって、全体として「仕切り構造論」となるように書き改め、新たにいくつかの論稿を書き下ろした。

主たる史料は、関東や甲斐・伊豆・能登などのいわゆる^{じかたもんじょ}地方文書である。膨大な古文書の解読を通して、村で暮らした百姓や従属民、村を訪れた芸能民や陰陽師、近江商人などに光を当てた。本書では、ムラ社会が重層構造をなしていたこと（生活の「村」、領主の村、組合村）、地域社会には多様な身分集団が存在していたこと、それらの「村」や身分集団がセーフティーネットの役割を果たしていたことなどを明らかにした。

2. Kumiko Haba & Martin Holland (Eds), *Brexit and After, Perspectives on European Crises and Reconstruction from Asia and Europe*, EUSA (European Union Studies Association) Asia Pacific, Springer, 2021, 213 p.

2016 年 6 月、イギリスの国民投票で「イギリスは EU を離脱すべきか、EU に残るべきか」が問われた。その結果、EU 離脱を選択した人々が過半数（51.8%）を超えたことにより、離脱が決定され、世界中が震撼した。その背景には社会格差の拡大の結果、高齢者、地方、低賃金労働者が移民排斥を唱えたことが関係している。

本書は、離脱が確定した 2020 年 1 月までの 3 年半の経緯を受けて執筆された。その基軸は、EUSA Asia Pacific の 2017 年東京大会、2018 年台北大会、2019 年上海大会で、イギリスの EU 離脱の報告を行った研究者たちによる「アジアとヨーロッパから見た、欧州危機とその後」に関する論文集である。

イギリスの EU 離脱に続く、コロナ禍の欧州の感染拡大・死者の増大と混乱、欧州の分裂とポピュリ

ズム、西欧民主主義の混乱、欧州・アジア関係の強化、特に中国の一帯一路政策と中東欧への影響力拡大、さらに中東欧のイリベラル・デモクラシー（非自由主義的民主主義）などを、イギリス、フランス、スペイン、オーストラリア、ニュージーランド、日本、中国、台湾など20か国近い国々の研究者が執筆し、多彩な角度から扱った書である。世界で最も販売数が多いとされる Springer から出版され、多くの論文が世界で引用されることになった。

イギリスのEU離脱の結果、欧州もイギリスもアジアに急接近し、その後「中国封じ込め」に至る、課題や問題点をも論じた、多彩な論文集である。

3. 羽場久美子編著、『移民・難民・マイノリティ——欧州ポピュリズムの根源』

彩流社、2021年2月初版、2021年11月再版。414頁。

本書は、2015年に100万人の難民が欧州に押し寄せた、欧州移民・難民危機を背景に、序論：移民・難民問題は何を提起しているか

第一部：難民の流出と周辺国の寛容——誰が人道的なのか？

第二部：欧州は移民・難民の何に苦しんでいるか？

第三部：The Day After：マイノリティとの共存は可能か？

という3部からなり、移民・難民問題の根源として、先進国の問題点をあぶりだしている。

第一部では、先進国の空爆とテロ、格差と貧困が移民・難民問題を生み出していること、8000万人近い難民のほとんどが、本国と周辺国に滞留し、周辺国トルコ、アフリカ、中南米諸国は、貧しいにもかかわらず移民・難民を積極的に受け入れていること、先進国は移民・難民流出に無関係ではないこと、が論じられる。

第二部では、世界の難民の1.25%、100万人が流れ込むことにより、欧州では難民危機が起これ、多くの国は国境を閉ざし、難民を警戒してポピュリズムが成長した。周辺隣国とは対極的な状況が描かれる。

第三部では、The Day Afterとして、移民・難民が受け入れ国に住み着き、2世3世が生まれた際の多様性と共存が描かれる。ロシアの雑多な空間バザールでの共存、中国の境界線に住むロシア人、東欧のハンガリー人マイノリティとの共存が論じられる。日本でも移民たちが教育によって共生・共存していく事実が明らかにされる。コロナ禍でも先進国の労働力不足により移民はむしろ増えている。フランスの報道機関AFPの優れた移民・難民の写真の表紙も貢献し、既に再版・書評が出されている。

4. ブックレット、JAICOWS（女性科学研究者の環境改善に関する懇談会）編、『非常勤講師はいま！——コロナ禍をこえて——』2021年3月初版、2021年5月再版。102頁。（羽場は編者）

JAICOWSは日本学術会議の会員・連携会員からなる組織であり、2018年、改正労働契約法施行の下、雇止めが続出する中、700人の非常勤講師にアンケートを行った。ブックレット『非常勤講師はいま！——コロナ禍をこえて——』は、そうした大学非常勤講師のアンケートに基づく切々たる訴えと悲惨な実態、関西・首都圏の非常勤講師組合の調査を加えた問題提起の書である。2021年現在、日本の非正規雇用者は4割を超え、うち女性の非正規雇用は56.6%である。大学の非常勤講師は、国立で教員全体の5割から6割、私立で首都圏や関西圏では7割を超える大学もある。

大学の授業の2人に1人以上が非正規の方々に支えられている。しかし彼らの給与は大学の正規教員

の6分の1以下、年間100万から200万程度、1年契約で生活は極めて不安定である。多くは修士号や博士号を持ちながら就職できず、結婚や子供を持つことも困難である。毎年1万人を超える博士号取得者は、文科省の正式調査でも16%が無職、7-8%が病気、行方不明か死亡という悲惨な統計が出ている。賃金は30年間ほとんど上がっていない。そうした中2020年、コロナ禍が非常勤講師を襲った。オンライン機器も自前、科研費も申請できない大学が多くを占める。

同年JAICOWSは、政権党から野党まで8党党首に、非常勤講師の要望書10項目を送り、総選挙前に回答を要求した所、8党すべてから前向きの回答を得た。4月に頒布を始めたブックレットは5月には売り切れ、再版が出された。

本書を契機に非常勤講師の環境改善が進むことを願ってやまない。改善を含めて関心を持って下さる方、ブックレットをさし上げます。

5. 羽場久美子編集代表、井口壽乃・大津留厚・桑名映子・田口雅弘・中澤達哉・長與進・三谷恵子・山崎信一編集委員、中欧・東欧文化事典編集委員会編『中欧・東欧文化事典』丸善出版、2021年8月初版。2021年11月再版。823頁。

本書、『中欧・東欧文化事典』は、丸善の文化事典シリーズの一環で、通常は1国文化の所、中欧・東欧のはほぼ16カ国を、200人、340項目で網羅している。時代により移り変わる中欧・東欧の枠組みの多様性から、ドイツとロシアという強国に挟まれた「はざまの地域」と呼ばれる。近代の強国拡大の時期には、ポーランドのように100年間国を失っていた地域もある。様々な民族からなるこの地は、宗教、民族、文化、芸術も多彩で、ヨーロッパを代表する文化がこの多様な地域に集中している。

音楽ではショパン、リスト、ヨハン・シュトラウス、ドボルジャーク、バルトーク、オペラ、オペレッタなど、知識人では、キュリー夫人、コペルニクス、ローザ・ルクセンブルク、クーデンホーフ・カレルギー、ルカーチ、マンハイム、ボランニー、美術では世紀末ウィーン、クリムト、ミュシャ、セセッション、アヴァンギャルド芸術、ジャポニスム、文学では、カフカ、クンデラ、ミツキエーヴィッチ、トカチュルク、美しい民族衣装に民族舞踊、大国のはざままで果敢に躍動する歴史、日本との関係も「ロシアという敵をはさんで味方同士」、歴史認識と歴史教科書など。

ハプスブルク帝国から、ナチ・ドイツの影響下、その後ソ連の下で社会主義体制、今や多くはEU・NATOに回帰するなど、思想的にも180度の転換を繰り返してきた中欧・東欧文化の多彩な魅力をぜひ体験して頂ければありがたい。

発売2カ月で再版となり出版社にも驚かれた。(本学角山朋子先生には、世紀末ウィーンをご執筆頂きました。ありがとうございました。)

図書館に入っています。どうぞ手にとってごらん下さい。

6. 深沢徹『日本古典文学は、如何にして〈古典〉たりうるか? —— リベラル・アーツの可能性に向けて』武蔵野書院、2021年4月、280頁。

日本文学の研究は、大きく古典文学と近代文学とに分かれて進められており、近代文学研究においては「近代(モダン)」とは何かという問いが欠かせない。それに対し古典文学研究の領域では、そもそも「古典(クラシック)」とは何かという問いを立てることがほとんどない。「古典」は、無前提に、すでにあるものとしてあつかわれる傾向にあり、初等・中等教育の現場でも、そうした問いを立てること

はまずない。

通常は見過ごされてしまっているそうした問いを改めて立て、「古典」という概念の成立の経緯にまでさかのぼって、その当否を問うことを、本書では行っている。ただ古いから「古典」なのではない。物事の規範となり、絶えず参照され、そこから靈感を得て、新たな創造行為へと向う人々の営み無くして、古典は古典たりえない。ならば、ギリシャ・ラテンの古典古代の伝統を引き継いで今にある西欧や、中国四千年の歴史を誇る漢字文化の重厚な流れに対抗して、如何にして日本文学は「古典」たりうるか。世界の中での日本文学の、つまりはそれを支えた日本語自体の、これは生き残りを賭けた切実な問いなのである。

本書であつかった作品は、『源氏物語』や「日記文学」などの宮廷文学、『大鏡』や『愚管抄』、『曾我物語』などの歴史叙述であるが、日本語の表現の質を高めることに、これら作品がどのように寄与・貢献し、さらにはその成果を教育現場に活かすには、どうすればよいかについての方策提言を行った。

以上

7. 角山朋子『ウィーン工房 帝都のブランド誕生にみるオーストリア近代デザイン運動史』

彩流社, 2021年7月, 440頁。

デザイン史研究とは耳慣れないかもしれないが、デザインされたモノやデザインという行為がもつ様々な意味と役割について検証する学問領域であり、近年は、社会的・文化的背景を含めたデザインの歴史という文脈で展開している。本書は、日本の近代デザインにも影響を与えたウィーンの高級工芸品会社「ウィーン工房」(1903-1932)を対象とする初の本格的な研究書である。全7章の構成で、19世紀後半から20世紀初頭のオーストリア近代デザイン運動の変遷を、その主軸を担ったウィーン工房を軸にたどる。各章はデザインとナショナリズム、商業性、装飾の問題へも踏み込み、ウィーン工房の全貌を作品、言説、史実から検証し、その実践の意義を探る。

本書ではウィーンの近代デザインを、オーストリア、そして中欧文化圏の歴史的・文化的素地を踏まえて論じることを目指した。オーストリアの近代デザイン運動は、芸術的理想だけではなく、デザインという行為やモノに付随する商業性、政治性に貫かれていた。また、ウィーン工房特有の装飾的造形が、第一次世界大戦中に急増した女性メンバーの旺盛な創作に負うものであった点も注目される(第6章)。最近の研究動向としてヨーロッパ近代デザイン運動における女性の役割が見直されており、ウィーンの事例は重要な研究対象となるだろう。

以上

8. 中村隆文『スコッチウイスキーの薫香をたどって——琥珀色の向こう側にみえるスコットランド——』

晃洋書房, 2021年9月, 180頁。

本書は、遠くにあるがどこか身近な「スコットランド」という国を理解するための一つの視座として、いまや嗜好品の代表ともいえる「スコッチウイスキー」をとりあげたものである。本書を読み進めてゆけば、『生命の水』のゲール語読みである「ウシュケパー」が「ウイスキー」となっていったその変遷の背後にある、スコットランドとイングランドとの関係、そしてその関係の変化に伴うスコットランド社会の激動な変化を理解できるであろう。

また、本書では、筆者が蒸留所をまわって取材した情報や、筆者自身が撮影したスコットランドの素

晴らしい風景も、「古き良きスコットランド」を読者にイメージさせ、その魅力を想像のなかでも膨らませてくれるものである。お酒好きな人だけでなく、食文化に興味がある人、旅行好きな人、歴史好きな人、など、さまざまな人たちに手に取ってほしい一冊である。

以上

9. 松本和也『文学と戦争——言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』

ひつじ書房, 2021年11月20日, 592頁。

本書は、アジア・太平洋戦争期と重なる昭和10年代文学（史）に関する研究プロジェクト（既刊拙著『昭和十年前後の太宰治』〔2009〕、『昭和一〇年代の文学場を考える』〔2015〕、『日中戦争開戦後の文学場』〔2018〕、『太平洋戦争開戦後の文学場』〔2020〕参照）の一貫として、多彩な文学活動を歴史的なアプローチによって多角的に検証した成果の集大成である。昭和10年代を通じて多くの文学者が関わった論争的なテーマの数々（新聞小説論、ヒューマニズム論、国民文学論ほか）、話題となった文学作品（上田廣「黄塵」、吉川英治「宮本武蔵」、岩田豊雄「海軍」、岸田國士「かへらじと」、太宰治「散華」ほか）の特徴や同時代受容、戦時下における文学者の生き方（高見順「文学非力説」、帰還した南方徴用作家ほか）をとりあげ、問題構成に応じてアレンジしたメディア調査、言説分析、テキスト読解をクロスさせた考察を集積した。

なお、戦時下の文化に対する問題関心（こと、戦時中に創られた報国文学－戦争記録画とその書き手・描き手たちの立場－葛藤）や戦争期の文化を現代から捉え返す距離感、さらには太宰治「散華」とのモチーフの通底性、といった諸点から、本書の装幀にこの上なくふさわしいと考え、装幀には現代美術家・会田誠氏による《大皇乃敵ル許曾死米》（1996）を使用させて頂いた。ご快諾頂きました会田誠氏、ミヅマ・アートギャラリーに、この場を借りて心からの感謝を申し上げます。

10. 島川崇、神田達哉、青木昌城、矢嶋敏朗著『人が活躍するツーリズム産業の価値共創』

成山堂書店, 2021年12月, 198頁

ツーリズム業界に関わる全ての人が、それを喜びとし、価値をともに創発していけるような環境を作っていかなければ、この業界は確実に衰退する。大切なのは、価値を「共創」することである。すなわち、観光客も、経営者も、一人ひとりの従業員も、観光地で観光客と接する業に従事している人も、観光地の地元住民まで、ツーリズムに関わるみんなが喜びを感じ、その果実の正当な分配を受けることができる環境の構築である。

この問題意識を共有した4名の執筆陣が、ツーリズム産業の価値共創のための議論を展開し、スーパーガイド、カリスマ添乗員と呼ばれる卓越したプロたちや、「価値共創」ができている他産業のリアル店舗の事例等も紹介する。

本書は、ツーリズム産業に現在従事する人びとはもちろん、これからこの業界に身を置きたいと願う志の高い学生たちへのエールでもある。これからこの業界にやってくる人びとのことも考えて、ツーリズムに関わることができて心からよかったと思える環境をみんなで力を合わせて作っていききたい、そう強く願って執筆した。

11. 藤澤茜『歌舞伎江戸百景 浮世絵で読む芝居見物ことはじめ』小学館, 2022年2月, 112頁。

江戸庶民文化の華と称された「歌舞伎」と「浮世絵」は、相互に影響し合いながら発展し、浮世絵版画の場合、半数以上は歌舞伎を題材にしていると考えられる。浮世絵と歌舞伎の分かれがたい2つの魅力を、100点を超える作例とともに紹介する本書は、「浮世絵を見ることで歌舞伎がよくわかる、歌舞伎を知ることによって浮世絵がもっと楽しくなる」をコンセプトに、さまざまな切り口で、両者の関係を明らかにするものである。

第一章では、歌舞伎役者が広告塔になった商品宣伝や双六やおもちゃ絵なども含め、浮世絵に描かれた歌舞伎の情報が日常にあふれていた実態を探る。第二章では、浮世絵と歌舞伎の歴史について取り上げ、江戸時代の社会、芸能、浮世絵の関連が分かる年表の掲載により、役者絵を江戸の社会状況の中に位置づけて解説した。第三章では歌舞伎の名作・名場面を紹介し、第四章では江戸歌舞伎の重要な名跡である市川團十郎家の活躍についてたどった。第五章では名作「仮名手本忠臣蔵」を描いた浮世絵作品を例に、芝居が史実を超えて庶民に根付いたことについて明らかにした。また、本書の最後には、浮世絵コレクターとしても名高い歌舞伎役者・市川猿之助のインタビュー記事を掲載しており、貴重な所蔵作品の掲載に加え、現代における役者絵の意義についても言及いただいた。

本書の全体を通して、各掲載図版に関する詳細な解説も用意し、江戸時代の情報発信という視点もあわせ、歌舞伎と浮世絵がメディアとして果たした役割についても考察した。